

台灣南岬
台灣最南端

鵝鑾鼻

鵝鑾鼻舊稱「沙馬磯」或「沙馬磯頭」。「鵝鑾」一詞為排灣族語，意為「帆船」，因在鵝鑾鼻附近有一巨大礁岩形似帆船，因而取名為「鵝鑾」；而「鼻」指突出的地形，即岬角之意，合稱為「鵝鑾鼻」。鵝鑾鼻是台灣最南端的岬角，為巴士海峽與太平洋的交界點。園內巨礁林立，獨特的高位珊瑚植物、熱帶海岸植物繁生其間，是絕佳的戶外植物教室。除了遠近馳名的歷史古蹟－燈塔之外，園內也發現本國家公園內最久遠的史前遺址，時間可遠溯至五、六千年前。

鵝鑾鼻(ガランビ)は、かつて「沙馬磯」あるいは「沙馬磯頭」と呼ばれていた。「鵝鑾」(ガラン)はパイワン語で、「帆船」の意味である。鵝鑾鼻付近に巨大な帆船型の礁岩があることから、この名がある。「び」は突出した地形、すなわち鋭角の岬の意で、合わせて「鵝鑾鼻」という。

鵝鑾鼻は台湾最南端にあたり、バシー海峽と太平洋の接点に当たる。園内には巨礁が林立し、珊瑚植物や熱帯海岸植物が繁茂し、独特の景観をもった天然の植物教室となっている。史跡として保存されている灯台のほか、園内には五・六千年前まで遡る我が国でも有数の先史遺跡がある。



墾丁國家公園管理處
Kenting National Park

南端生態教室

自然の生態教室



黃裳鳳蝶

鵝鑾鼻礁林公園全區為隆起珊瑚礁地形，園內巨礁羅列、步道縱橫，擎天石、濛豬石(海蝕礁岩)、親吻石(海蝕凹壁)、冤家路(礁岩裂隙)、古洞、非非洞(石灰岩洞)等地形多變。而典型的高位珊瑚礁環境與熱帶的海洋性氣候，孕育了獨特的高位珊瑚礁植群：大多是嗜光、耐旱、抗鹽而且體型善作變異的植物，如山豬朥、山欖、葛塔德木、紅柴等。而園區內的海濱棧

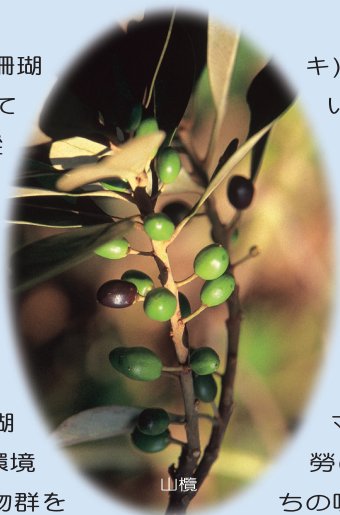


親吻石

道，更是觀察臨海珊瑚礁植物(水芫花、草海桐、白水木、黃槿等)的絕佳戶外教室。

茂密的珊瑚礁森林更提供了衆多生物活動的空間：烏頭翁、樹鵲、小彎嘴畫眉或紅尾伯勞的鳴聲時有所聞；黑點大白斑蝶、黃裳鳳蝶、玉帶鳳蝶等蝶類迎風飛舞；斑卡拉蝸牛、斯文豪氏攀蜥、陸蟹類也常出現於夏日的園區內。

鵝鑾鼻礁林公園には珊瑚礁地形が各所に隆起している。林立する巨礁、縦横に走る歩道、天石、濛猪石(海蝕礁岩)、親吻石(海蝕凹壁)、冤家路(礁岩裂隙)、古洞、非非洞(石灰岩洞)など多彩な地形がある。さらに、典型的な隆起珊瑚礁と熱帯海洋性気候の環境に育まれて、特異な植物群を形成している。山猪朥・山欖(アカテツ)・葛塔德木(ヤマモガシ)・紅柴(*Aglaia formosana*)など、多くは熱射や乾燥、塩害に耐える変異植物である。海浜棧道では、水芫花(ミズガンピ)・草海桐(*Scaevola hainanensis* Hance)・白水木(モンバナ



山欖

キ)・黄槿(オオハマボウ)といった臨海の珊瑚礁植物を鑑賞しながら散策ができる。

こうした植相の中に豊かな生物の活動空間がある。烏頭翁(クロガシラ)・樹鵲(タイワンオガナ)・小彎嘴畫眉(ヒメマルハシ)あるいは紅尾伯勞(アカモズ)といった鳥たちの鳴き声が絶え間なく聞こえる。初夏には黒点大白斑蝶(オオゴマダラ)・黄裳鳳蝶(キシタアゲハ)・玉帶鳳蝶(クロアゲハ)などの蝶々が飛び舞っている。夏には、斑卡拉蝸牛(カタツムリ)・斯文豪氏攀蜥(キノボリトカゲ)・黄灰澤蟹(*Geothelphusa albogilva*)淡水のカニが顔をのぞかせる。

形成している。山猪朥・山欖(アカテツ)・葛塔德木(ヤマモガシ)・紅柴(*Aglaia formosana*)など、多くは熱射や乾燥、塩害に耐える変異植物である。海浜棧道では、水芫花(ミズガンピ)・草海桐(*Scaevola hainanensis* Hance)・白水木(モンバナ



水芫花



草海桐



紅尾伯勞



黃槿



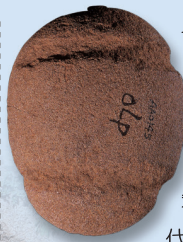
黃灰澤蟹

擎天石

史前人類的生活天地

先史人類の史跡

民國45年鵝鑾鼻開路時挖出石棺，為台灣大學地質系林朝榮教授發現；民國70年開闢礁林公園鋪設石板步道時，在園區內的「又一村」、「古洞」



卵形網罟

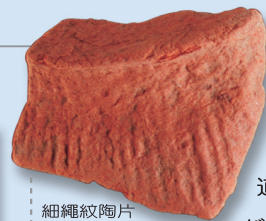
發現豐富的史前時期文化遺留，是台灣本島繼台東八仙洞遺址（長濱文化）之後，證實出土先陶文化遺留（舊石器時代晚期文化相）的考古遺址。

以整體的環境來看，鵝鑾鼻公園內聳立的巨礁，提供史前人類隱蔽、背風的棲所；部份珊瑚礁石灰岩縫間可見淡水伏流，應是史前人類重要的淡水水源；而海岸近在咫尺，史前人



貝刮器

類可就近撈捕漁獲或採集貝類。因此園內的遺址出土極為豐富的史前文化遺物，共有四個文化層，分別屬於四個具有時間先後次序的史前文化相。



細繩紋陶片

1956年、当地の道路工事の折に石棺が掘り出され、台湾大学地質学の林朝教授によって確認された。さらに1981年には、礁林公園の歩道建設の際に、「又一村」・「古洞」において先史時代の遺跡に遭遇した。台湾本島では台東八仙洞遺跡（長濱文化）につぐ、旧石器時代晩期の遺跡の発見であった。

周囲の環境を検証



するに、鵝鑾鼻公園内に大きな珊瑚礁岩が林立しており先史人類の格好の住処になったものと推察される。珊瑚礁の石灰岩の隙間には淡水の伏流がみられ、また海岸に近いので、漁撈や貝類の採集にも適したものとみられる。園内の遺跡から発掘された先史文化の遺物は、四つの地層に分かれており、整理すると以下のようになる。



藍天綠意中的燈塔



台灣八景

鵝鑾鼻燈塔

台灣八景に選出

日據時期，昭和二年(1927)，「台灣日日新聞社」舉辦票選，以投票方式決定新「台灣八景」。『鵝鑾鼻燈塔』經投票初選，被選為台灣八景之一。1929年經審查委員視察確定，同年十二月，『台灣八景鵝鑾鼻碑』豎立。其後，鵝鑾鼻燈台甚至躍升為台灣八景之首，名聞全國。目前此碑仍立於燈台南側。



台灣八景碑

昭和二年(1927)、『鵝鑾鼻燈台』は「台灣日日新聞社」の募集した投票によって「台灣八景」に選出された。1929年に審査委員の視察を経て確定し、同年十二月に、『台灣八景鵝鑾鼻碑』が設置されている。その後、鵝鑾鼻燈台は台灣八景のトップに評価されるに至る。現在この碑は燈台南側に保存されている。

文化層次 文化層	距今年代 年代	石器製作方式 石器製作方式	陶器特徵 陶器的特徵
鵝鑾鼻第一史前文化相 鵝鑾鼻第一先史文化相	約6500~5000年 約6500-5000年前	敲打 打製	無製陶技術（先陶文化） 製陶技術なし
鵝鑾鼻第二史前文化相 鵝鑾鼻第二先史文化相	約4500~3500年 約4500-3500年前	敲打・琢磨 打製・磨製	紅色細繩紋陶 紅色細繩紋
鵝鑾鼻第三史前文化相 鵝鑾鼻第三先史文化相	約3500~2500年 約3500-2500年前	敲打・琢磨 打製・磨製	彩繪紋飾（彩陶） 彩繪紋飾（彩陶）
鵝鑾鼻第四史前文化相 鵝鑾鼻第四先史文化相	約2500~1200年 約2500-1200年前	敲打・琢磨 打製・磨製	無紋飾（素面陶） 無紋飾（素面陶）

海明燈

鵝鑾鼻燈塔

鵝鑾鼻燈台

清同治六年(西元1867年)，美國商船「羅發號」由汕頭赴牛莊途中，於七星嶼附近觸礁，船長夫婦與水手於潭仔灣登陸，遭龜仔角社(今社頂)原住民襲擊，僅一名華人水手倖獲逃生。另琉球船民亦曾在南岬一帶遇難引發日本攻台的牡丹社事件(1874年)，由於船難事件頻仍，清廷於光緒元年(1875年)委託英國皇家地理學會會員畢齊禮至恆春地區勘察燈塔建地，並支付一百銀兩向龜仔角社原住民購買南岬燈塔預定地。

光緒七年鵝鑾鼻燈樓開工起建，光緒八年落成，光緒九年啓用。為防原住民侵擾，該塔建築成砲壘形勢，以塔基作為砲台，圍牆上設有槍眼，牆外四週設壕溝並置槍械自衛，派有武装士兵守衛，為世界上少有的武装燈塔。

光緒廿一年(西元1895年)，清廷撤台時炸毀燈塔；明治31年(西元1898年)，日人撥款修復重建。二次大戰末期又遭盟機炸毀，台灣光復第三度整建，塔高21.4公尺，內設大型四等旋

轉透鏡電燈，光度達180萬燭光，每30秒旋轉一周，見距20海浬，是台灣地區光力最強的燈塔，有『東亞之光』的美譽。目前劃為墾丁國家公園的史蹟保存區。



東亞之光

清代の1867年、米国の商船「Rover」号が沖合いを航行中に七星嶼付近で座礁し、船長夫婦と水夫が潭仔灣に上陸した。ところが亀仔角社(現在の社頂)の原住民の襲に遭い、一名の華人水夫が一人だけ助かった。さらに琉球の船が南岬で遭難し、同じく原住民に襲撃されたことから、日本による牡丹社事件(1874年)を招いた。このように船の遭難がこの海域で頻発したことから、1875年に英国王室地理学会会員M.Beazeley氏に委託し

て燈台建設計画を立てるとともに、亀仔角社の原住民から南岬燈台予定地を購入した。

1882年に鵝鑾鼻燈台は完成し、翌年から使用が開始された。原住民の襲撃から守るために、周囲は銃眼のあるトーチカで保護され、砲台も設置された。当時は四隅に壕が掘られて、兵士が防衛したという。世界でも数少ない武装した燈台であった。

1895年、下関条約のあと清軍が撤退するときに燈台を壊したが、1898

年に、日本によって修復された。さらに二次大戰で米軍の空襲を受けた。戦後三度改築され現在の姿になった。高さ21.4メートル、内部には大型四等回転電球が設置され、光度180万カンデラ、光達距離20カイリは台湾最大の光力。30秒毎に一周する光は、『東亜の光』と呼ばれている。周辺は墾丁國家公園の史蹟保存区に指定されている。